

ももこ 様

愛用ミシン:LM410

## 父が踏んだミシン


「通園バッグはお母さんの手作りをお願いします。買ったものよりぬくもりが伝わります」

父は、そのおたよりを手に、頭を抱えた。わが家には通園バッグを手作りできる母はいない。小さい頃母を亡くした私は、父の手ひとつで育てられた。

「弱ったなあ」と言いながら、父は押し入れの中から、母のお嫁入り道具のミシンを取り出した。長らく使っていないため、カバーはほこりをかぶっていた。父は、ミシンの取り扱い説明書と、バッグの作り方が書かれた紙に首っ引きで、入園式までになんとかそれを仕上げた。

私が寝静まった夜半、ミシンの音がよく鳴っていたのをいまでも思い出す。カタ、カタ、カタ。最初は、今にも止まりそうなぎこちない音だったのが、次第にカタカタカタカタ、と調子のよいリズムを刻んでいった。それが私の子守唄がわりだった。今のようにボタンひとつでワンタッチ、というわけにはいかず、足踏みミシンだった。ぶきつちよな父は、下糸ひとつ通すのにも、さぞや苦労しただろう。背の高い父には、ミシン台が低すぎて、いつも少し猫背気味だった。その姿が、私には余計に切なかった。

完成したバッグはお世辞にも上出来とは言えなかった。ミシン糸があちこちでからまったり、もつれたりして糸の始末が悪い。焦って縫ったのか、縫っているうちに曲がっていったようで、いびつな形をしている。父には口が裂けても言えなかったけど、私は、そのバッグを持つのが心底恥ずかしか



った。友達が持っている、ママ特製のフリルやリボンがあしらわれた目をみはるような見栄えのいいバッグと比べて、みじめさが募ったものだ。不格好なバッグを隠し持つようにして胸に抱えて通園した。

ある日私は、同級生の男児を砂場に押し倒して先生に注意された。すぐに父が呼び出された。父は私を今までで一番ひどく叱り、その訳を聞いた。私は、口を真一文字に結んで開かなかった。理由など、言えるわけがなかった。なぜなら、その子が、私に、「ダサイカバン。ママがいなくて可哀そう」と、からかったからだ。自分だって内心ダサイと思っていたのに、いざ他の子から同じことを言われると、許せなかった。自分で思っているのと、人から言われるのでは全然違う。「これは、私のお父さんが一生懸命作ったんだよ」と大きな声でみんなに言いたくなった。

私のことを気の毒に思った祖母が、新しいバッグを私にプレゼントしてくれたこともあった。うさぎのアップリケのついた、ピンクのキルティングの、それは可愛いバッグだった。その年頃の女の子なら、誰もが、「こんなものを持ちたい」と夢見るようなバッグだった。けれど、自分でも上手く説明が出来なかったが、私は、どうしても祖母製のバッグを使う気になれなかった。父が傷つくと思ったのだろうか。それはタンスの肥やしとなった。

私はそれ以来、父の作ったバックをこそこそと持つのはやめようと思った。堂々とそれを持って、胸を張って幼稚園に行った。本人が堂々とさえしていれば、いじめる子などいないのだ。先生も配慮してくださり、「これは、ともちゃんのパパが頑張って作ったんだよ」とみんなの前で言ってくださった。

あれから 30 年がたち、今では私が自分の子どものためにミシンを使うようになった。あの頃のミシンから随分性能もよくなり、簡単にバッグ類を作れるようになった。あの時の父お手製のバッグは今も手元にある。少しほつれてしまった名前の縫いとりを、そっと撫でてみる。不覚にも涙があふれた。夜中に私が眠ってから、慣れないミシンを踏んでいた父の背中を、私はずっと忘れないだろう。